

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 17 2013*

『翻訳満語纂編』と『清文鑑和解』の編纂過程

松 岡 雄 太

On the Editing Process of Two Manchu-Japanese Dictionaries
Honyaku mango sanhen and *Shinbunkan wage*

MATSUOKA Yuta

長崎外大論叢

第17号
(別冊)

長崎外国語大学
2013年12月

『翻訳満語纂編』と『清文鑑和解』の編纂過程

松岡雄太

On the Editing Process of Two Manchu-Japanese Dictionaries
Honyaku mango sanhen and *Shinbunkan wage*

MATSUOKA Yuta

Abstract

The Chinese translators at Nagasaki received an order to study Manchu language from Tokugawa Shogunate in the early 19th century. As a result, they edited two Manchu-Japanese dictionaries: *Honyaku mango sanhen* and *Shinbunkan wage*, half a century later. This paper discusses mainly the following four points: first, why did it take about 50 years from being given the mandate to study Manchu language to edit these dictionaries? Second, what kind of the Chinese translators participated to edit them? Third, how did the Chinese translators plan to edit them? Finally, when did they edit *Shinbunkan wage* that were not obvious exactly?

キーワード：長崎唐通事、『清文鑑和解』、『翻訳満語纂編』

1. 研究の目的

長崎唐通事¹は19世紀初に幕府から満洲語の学習を命じられたとされるが、これは日本における満洲語学の萌芽の一つとされている。

我が国に於ける満洲語学は文化元年（1804年：筆者注）露西亜の国使が日露両文の外に満洲文で書いた国信を齎して、徳川幕府に開国を求めたのを契機として、同五年その翻訳の命を蒙った日官高橋景保によって始められた。満文輯韻二十七卷、増訂満文輯韻十二卷、清文鑑名物語抄六卷等の著述はこの難業に成功した景保が、更に斯学に進化した苦心の結晶に外ならぬ。別に同じ機縁に由って、幕府は長崎の訳官等にも同語の研究を命じ、辞書の編纂に従事せしめたがこれは容易に進捗せず、約五十年後の嘉永四年以来安政二年にかけて清文鑑和解または翻訳清文鑑と題する四卷五冊と翻訳満語纂編五卷十冊とを作り得たに止まって、計画した辞書の完成を見るには至らなかった。此の如く我が国に於ける満洲語の研究は江戸と長崎との両地に発芽したのであったが、本来露西亜との政治的交渉に促されて播かれた種であっただけに、その後この語が国交上に用無きことが認められると共に、折角萌え出した若芽に培うものもなく、無残に枯死の情態に陥ってしまったのは、惜しみても余りあることと言わねばならぬ。

（羽田 1937 序言より。下線は筆者による。日本語の表記は現代かなづかいに改める）

19世紀初に満洲語の学習を命じられた唐通事は、それから約半世紀後、学習の成果として二種類の

満洲語辞書を編纂することになる。これが長崎奉行所に進呈され、その後、長崎県立図書館を經由し²、現在は長崎歴史文化博物館に所蔵される『清文鑑和解（翻訳清文鑑）』³と『翻訳満語纂編』⁴である⁵。

本論文の目的は、この二種類の満和辞書がどのようにして編纂されたのか、その背景と過程について、先行研究を再整理するとともに、先行研究で明らかでなかった点について考察を加えることにある。

2. 辞書の編纂を開始するまで

2.1. 満洲語の学習を命じられる

文化元（1804）年に、ロシアの使節レザノフ（Resanoff）が、露文の本書に添えて、日本文と満洲文の国書をもたらした際、日本側に露文と満洲文を解するものはおらず、肝心の日本文は、文字は読めるが主意が分からず、結局、ドイツ学者のラングスドルフ（G. H. von Langsdorff）に、ロシア語をオランダ語に翻訳してもらうことで、国書の内容を解説するにいたったという。幕府はこの一件を契機として江戸の高橋景保と長崎唐通事に満洲語の学習を命じた。その後まもなく、清国より『御製増訂清文鑑（以下、『清文鑑』と称する）』⁶を取り寄せ、文化5（1808）年にその『清文鑑』を与えられた高橋景保は、文化7（1810）年にレザノフがもたらした満洲文国書の和訳、『魯西亜國呈書萬文訓訳強解』を完成させる。高橋はその後も精力的に満洲語の研究を続け、いわゆる「シーボルト事件」によって文政12（1829）年に獄中死するに至るまでの間、文化13（1816）年に『清文韻府』と『満文散語解』、文政3（1820）年に『増訂満文輯韻』、文政8～10（1825～1827）年に『清文鑑名物語抄』といった著述を次々と完成させる（新村 1914、武藤 1917a, b）。

一方で、同時期に満洲語の学習を命じられた長崎唐通事とはいえば、この間、文化8（1811）年に『清文鑑』が長崎に届き⁷、翌文化9（1812）年には長崎（中島）聖堂⁸で『清文鑑』の閲覧が許されるようになるものの⁹、その後、満洲語の学習が進んだという史料はなく、二度の中断を経て¹⁰、結局、満洲語の学習をはじめたのは、冒頭に示したように、高橋景保から遅れること、約半世紀を経た1850年のことである。



【写真左】中島聖堂遺構大学門（県有形文化財）。現在は興福寺境内に移転されている。

【写真右】中島聖堂跡。現在その場所にはマンションが建っている。（筆者撮影）

2.2. 満洲語の学習を始めなかった理由

この間、なぜ唐通事は満洲語を学び始めなかったのか、或いはなぜ二度に亘る中断があったのか。この点については、新村（1917）と羽田（1936）に記述が見られる。



【写真】蔡慎吾の墓碑。文字は墓碑の両側面と裏面に刻まれている。
(筆者撮影)

新村(1917)は、長崎の郷土史家古賀十二郎氏から聞いた話として、唐通事は明末に日本へ亡命した者たちの子孫であるから、清朝を建国した満洲族の言語である満洲語を学ぶことを潔しとしない者があった、といった内容が、唐通事の蔡慎吾(1894-1876)の碑文(実際は墓碑)に見られると述べる。羽田(1936)は、新村(1917)のこの指摘を受け、実際に長崎の本蓮寺に存する蔡慎吾の墓碑を探り当て、その事実を確認している¹¹⁾。

2.3. 満洲語の学習を再開した理由

では、このように長年に亘って満洲語の学習を放棄していた唐通事が、なぜ1850年になって突如、満洲語の学習を再開したのだろうか。この点については、管見の限り、従来の研究では言及されていない。このことに直接言及した史料も確認されていない現段階においては、結局のところ推測するよりほかにないが、筆者は二つの理由が可能性として挙げられると考える。まず、一つ目は、唐船貿易との関係である。以下の【表1】は安永年間以降に長崎に入港した唐船数の一覧である。

【表1】長崎渡来唐船数一覧

年	数	年	数	年	数	年	数
1773 安永2	13	1795 7	10	1816 13	14	1837 8	7
1774 3	13	1796 8	5	1817 14	6	1838 9	6
1775 4	13	1797 9	10	1818 文政元	5	1839 10	5
1776 5	13	1798 10	9	1819 2	12	1840 11	7
1777 6	13	1799 11	5	1820 3	8	1841 12	6
1778 7	13	1800 12	9	1821 4	7	1842 13	6
1779 8	13	1801 享和元	19	1822 5	8	1843 14	6
1780 9	13	1802 2	11	1823 6	7	1844 弘化元	7
1781 天明元	13	1803 3	10	1824 7	9	1845 2	5
1782 2	13	1804 文化元	11	1825 8	4	1846 3	4
1783 3	13	1805 2	12	1826 9	11	1847 4	9
1784 4	13	1806 3	5	1827 10	13	1848 嘉永元	4
1785 5	13	1807 4	7	1828 11	5	1849 2	6
1786 6	12	1808 5	12	1829 12	9	1850 3	6
1787 7	13	1809 6	10	1830 天保元	10	1851 4	5
1788 8	13	1810 7	11	1831 2	4	1852 5	7
1789 寛政元	13	1811 8	11	1832 3	10	1853 6	0
1790 2	9	1812 9	13	1833 4	6	1854 安政元	2
1791 3	10	1813 10	13	1834 5	4	1855 2	5
1792 4	10	1814 11	7	1835 6	11	1856 3	1
1793 5	12	1815 12	11	1836 7	8	1857 4	4
1794 6	10	金井俊行編『長崎年表』(長崎市史編さん委員会【編】(2012: 486-487)から一部抜粋)					

安永年間から天明年間までの入港数は十三隻と決まっていたものと思われる。寛政年間以降、文化年間までは、年によって入港数に若干の増減があるが、概ね毎年十隻程度の入港は見込まれていたものと思われる。それが文政年間、天保年間になると、十隻以上入港する年が稀になり、天保年間の終わりから弘化年間、嘉永年間になると、十隻以上入港する年は完全になくなる。つまり、天保年間の

初めまで平均して月に一隻は入港していたのが、天保年間の終わりに二カ月に一隻程度に半減しているのである。顕著な年は嘉永6（1853）年で、一隻の入港もない。なお、嘉永6年といえば、『翻訳満語纂編』が編纂されはじめて三年目に当たる年である。

ここから推測されるのは、唐通事が満洲語の学習を再開した嘉永3（1850）年頃には、既に唐通事たちの間で、今後唐船の入港数が大幅に回復する見込みがない、むしろ減少の一途をたどることが免れないといった雰囲気蔓延していたのではないかと、ということである。唐通事の主たる業務は唐船貿易に関わるものであるから、唐船の入港がなければ、それに伴って唐通事の仕事もなくなる。その状態が長期的に続くことになれば、唐通事にとっては死活問題であったろう。そこで打ち出した対策が、半世紀前に幕府から命を受けてなおざりにになっていた満洲語の学習（満洲語辞書の編纂）の再開だった、と筆者は考えるのである。なお、唐通事が初めて満洲語を命じられたのは文化2（1805）年頃であるが、文化2年といえば、まだ唐船貿易が本格的に衰退しはじめる前のことである。

また、それを後押ししたのが、阿蘭陀通詞による英語辞書の編纂だったと筆者は考える。すなわち、唐通事が満洲語学習をはじめた（再開した）理由の二つ目は、同時期に阿蘭陀通詞が編纂した『エゲレス語辞書和解』との関係である。

文化5（1808）年の「フェートン号事件」を契機に幕府から英語の学習を命じられた阿蘭陀通詞の英語研究は、文化8（1810）年成立の『諳厄利亞国語和解（諳厄利亞興学小筌）』、文化11（1814）年成立の『諳厄利亞語林大成』の後、しばらく途絶えていたが、嘉永元（1848）年に長崎に送還されたラナルド・マクドナルド（Ranald Macdonald 1824-94）から十四名の阿蘭陀通詞が英語を学んだことを契機に、その二年後の嘉永3（1850）年に阿蘭陀通詞は幕府の命により再度英語学習に取りかかる。その成果が嘉永4（1851）年から安政元（1854）年にかけて編纂された『エゲレス語辞書和解』である（石原 1984）。この『エゲレス語辞書和解』の編纂時期は、唐通事の満洲語辞書編纂の時期と完全に重なるのである¹²。唐通事は総じて阿蘭陀通詞より地位が高かったとされるが、阿蘭陀通詞が英語研究で活躍するのを、唐通事は看過することができなかったのではないだろうか。唐船貿易が衰退しつつある中でとなれば尚更である。

以上はあくまで筆者の推測にすぎないが、ともかくもこのようにして唐通事は、嘉永3（1850）年に満洲語の学習をはじめることになったのである。

3. 辞書の編纂過程

3.1. 訳編者

満洲語の学習を再開したといっても、文化年間に満洲語の学習を命じられたときの唐通事たちが満洲語を学んだわけではない¹³。まず、『翻訳満語纂編』の訳編者は、「衆学生」を一名と数えれば総勢22名であり、その名は【表2】に挙げる通りである。訳編者の名は、各巻の序文、及び、各人が担当した語彙のはじめに記載があるので、そこから全て分かる。なお、『翻訳満語纂編』は序文に識語があるので、成立年はそこから分かる。巻1の成立年は嘉永4（1851）年であり、以後年一卷（二冊）のペースで、最後の巻5は安政2（1855）年に編纂されている。

【表2】『翻訳満語纂編』の訳編者と担当巻（網掛け部分が担当巻）

	氏名	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5
1	鉦鹿 太作 篤義					
2	彭城 大次郎 昌宣					
3	彭城 助次郎 種美					
4	高尾 宗三 延之					
5	蔡 恒次郎 正邦					
6	鄭 右十郎 永寧					
7	官梅 源八郎 盛芳					
8	穎川 保三郎 春重 ¹⁴					
9	蘆塚 五郎助 恒徳					
10	游龍 彦三郎 俊之					
11	彭城 定三 廣林					
12	石寄 次郎[太] 親之					
13	神代 時次 定光					
14	神代 時次 延長					
15	彭城 政次郎 永祥					
16	早野 新次郎 志明					
17	衆学生					
18	呉 碩三郎 為祥					
19	早野 新次郎 晴貞					
20	穎川 藤吉郎 道香					
21	彭城 常三郎 雅美					
22	穎川 君平 雅範					

【表2】のうち、太字で表記した鄭永寧、穎川雅範、彭城昌宣、彭城廣林、穎川春重の五名は『清文鑑和解』の訳編者でもあり、『清文鑑和解』はこの五名によって編纂されたものである。以下の【表3】は『清文鑑和解』の訳編者の一覧である。

【表3】『清文鑑和解』の訳編者と担当巻

巻1	清文鑑序：鄭永寧（訳述）、穎川雅範（校合） 増訂清文鑑序：彭城昌宣・彭城廣林（訳述）、鄭永寧（校合） 本文：穎川雅範（訳述）、鄭永寧（校合）
巻2上	鄭永寧（訳述）、彭城昌宣・彭城廣林（校合）
巻2下	鄭永寧（訳述）、彭城昌宣・彭城廣林（校合）
巻3	彭城昌宣（翻訳）、鄭永寧（校合）
巻4	穎川春重（訳述）、鄭永寧（校合）

上に挙げた唐通事たちの素性、すなわち、どの家系の者であり、また、年齢や役職がどの程度であったのかを示したものが以下の【表4】である。ここに挙がっていない（すなわち辞書編纂に関わっていない）唐通事の家系もあるが、以下の【表4】からは、概ね、各家系から一名ずつ比較的若い者たちが、一族を代表する者として集められたのだらうと窺い知れる。また、この辞書編纂を機に昇進している者もいる。

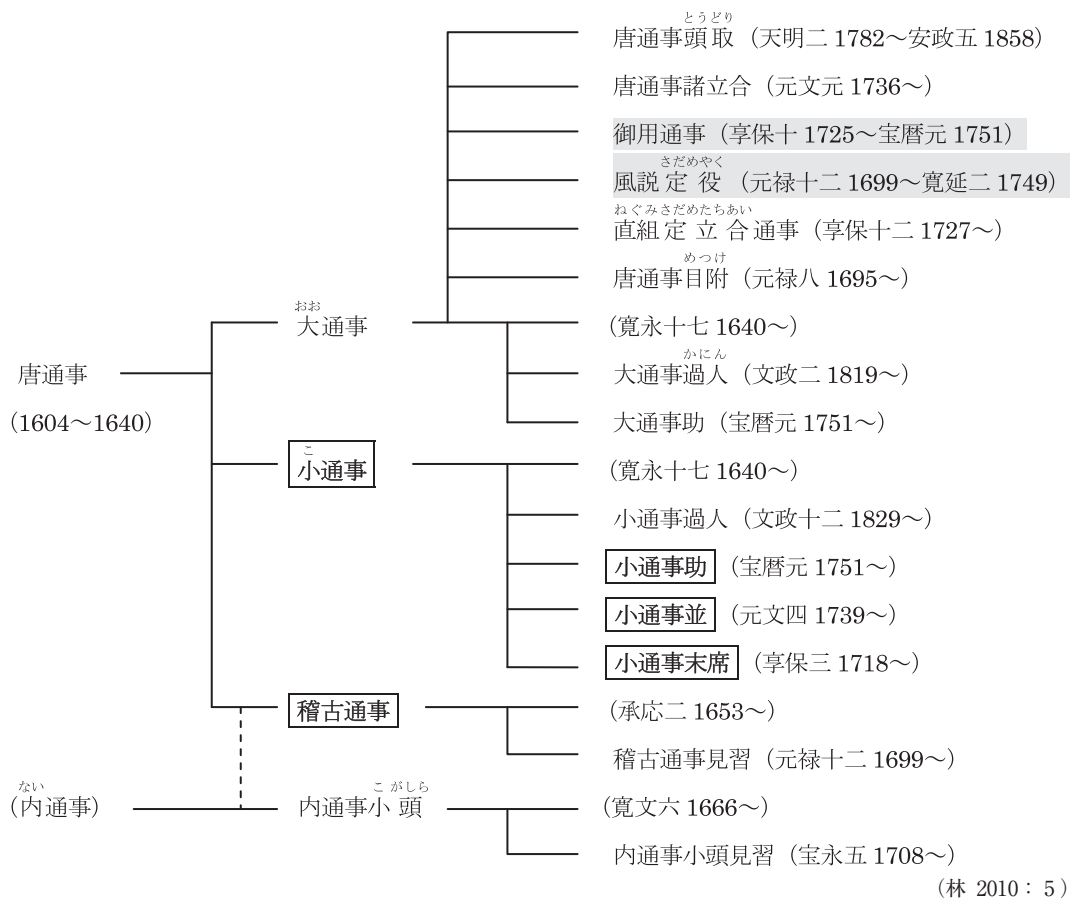
【表4】訳編者の詳細（宮田 1979を基に作成）

	氏名	初参加時の役職と年齢	備考
1	鉦鹿 太作 篤義	小通事末席 22歳	魏之琰を祖とする鉦鹿家の本家8代 鉦鹿篤義（1830-1892）。辞書編纂に参加し始める1851年は小通事末席に昇格した年。後年、1874年には台湾牡丹社討伐に通訳として参加。

2	彭城 大次郎 昌宣	小通事末席 20歳	劉鳳岐を祖とする彭城家の本家 11代 彭城中平 (1832-1874)。辞書編纂に参加し始める1851年は小通事末席に昇格した年。1855年には小通事並、1858年には小通事助、1860年には小通事過人に昇格。1859年には鄭幹輔とともにマクゴーンから英語を学ぶ。
3	彭城 助次郎 種美	小通事末席 20歳	劉焜臺を祖とする彭城家の分家7代に、彭城助次郎 (1832-1854) の名が見える。しかし、1854年に死去しているはずなので、辻褄が合わない。
4	高尾 宗三 延之	稽古通事 22歳	高尾藤九郎を祖とする高尾家の分家7代 高尾宗三 (1830-1864)。1857年に小通事末席に昇格。高尾分家の最後の唐通事。
5	蔡 恒次郎 正邦	稽古通事格 36歳	蔡昆山 (三官) を祖とする蔡家の本家8代 蔡恒次郎 (1817-1858)。1850年に稽古通事格、1855年に稽古通事に昇格。1856年には御楽園唐方詠方になる。稽古通事とはいえ、蔡家から出た初めての唐通事。
6	鄭 右十郎 永寧	小通事末席 23歳	鄭二官 (宗明) を祖とする鄭家の鄭永寧 (1829-1897)。鄭幹輔の子 (養子)。辞書編纂に参加し始める1851年は小通事末席に昇格した年。1860年には小通事過人に昇格。後年は外務省の権大書記官となり、日清修好条規の調印にも参加。死去の直前に颯川君平『訳司統譜』の跋文を書く。
7	官梅 源八郎 盛芳	小通事助 37歳	官梅三十郎を祖とする林・官梅家分家の8代 官梅三十郎 (1816-1860) 1851年に小通事助、1856年に小通事過人に昇格。1860年に病没御暇。
8	颯川 保三郎 春重	小通事末席 21歳	陳沖一を祖とする葉姓の颯川家の本家8代 颯川保三郎 (1831-1891) 辞書編纂に参加し始める1851年は小通事末席に昇格した年。1855年に小通事並、1857年に小通事助に昇格。1880年に鄭幹輔の碑文を撰文。
9	蘆塚 五郎助 恒徳	不明	不明
10	游龍 彦三郎 俊之	小通事並 23歳	游龍雲蔵を祖とする分家の游龍彦次郎 (1829-1865)。先名が彦三郎。辞書編纂に参加し始める1851年は小通事並に昇格した年。1855年には小通事助、1860年には小通事過人に昇格。
11	彭城 定三 廣林	無給稽古通事 21歳	彭城安右衛門を祖とする分家の彭城直治 (1831-??) か? 1853年に御暇御免。『翻訳満語纂編』の編纂に関わったのも1853年までであるから、辻褄は合う。
12	石崎 次郎[太] 親之	小通事助 30歳	柳姓の人を祖とする柳屋(石崎)家の分家4代 石崎次郎太(1822-1882) 1854年に小通事過人、1860年に小通事に昇格。
13	神代 時次 定光	不明 ⁵	不明
14	神代 時次 延長	小通事末席 24歳	熊姓の人を祖とする神代家の神代延長 (1831-1894)。妻は颯川保三郎 (上述) の13歳年下の妹。1851年に小通事末席に昇格。老年は東京外国語学校、長崎外国語学校、長崎県中学校教諭となる。
15	彭城 政次郎 永祥	小通事末席 26歳	劉焜臺を祖とする彭城家の本家10代 彭城政次郎 (1829-??) か? 1859年に御暇御免。
16	早野 新次郎 志明	小通事並 33歳	兪惟和を祖とする河間家の早野新次郎 (1822-1856)。1851年に小通事並、1855年に小通事助に昇格。
17	衆学生	—	—
18	呉 碩三郎 為祥	小通事助 30歳	呉振浦を祖とする呉家の本家8代 呉碩三郎 (1824-1891)。1853年は小通事助に昇格した年。1856年には小通事過人、1861年には小通事に昇格。
19	早野 新次郎 晴貞	不明 ⁶	不明
20	颯川 藤吉郎 道香	小通事末席 年齢不詳	陳沖一を祖とする颯川家の本家9代 颯川四郎次 (??-1860)。8代藤左衛門道恭の子。1855年に藤吉郎から四郎次に改名。
21	彭城 常三郎 雅美	不明	不明
22	颯川 君平 雅範	小通事 30歳	陳沖一を祖とする葉姓の颯川家の分家8代 颯川君平 (1822-1862) 1861年に大通事過人に昇格。雅範の子9代颯川君平 (1843-1919) は『訳司統譜』の著者。

上原 (1971: 16) は、満洲語の辞書編纂に関わった唐通事たちは「すべて20歳前後の青年で、せいぜい稽古通事、多くは稽古通事格か稽古通事見習の者であった」と述べるが、それは誤りである。『訳司統譜』を中心に唐通事の家系を整理した宮田 (1979) の成果は大きいと言わざるをえない。なお、以下の【表5】は唐通事の職制一覧である。

【表5】唐通事の職制分化表（些細なものは省略、網掛けは嘉永年間に既に廃止されている職）



また、上記の唐通事の他に『翻訳満語纂編』の序文に三名の者が名を連ねている。実際に翻訳作業に携わったのは比較的若年の小通事や稽古通事たちであるが、以下の三名は年齢も高く、特に平野繁十郎祐長は当時の大通事であり、残る二名も辞書編纂の後に大通事に昇格していることから、これらの辞書の監修の任に当たっていたものと考えられる¹⁷⁾。

【表6】監修者の詳細（宮田1979を基に作成）

1	平野 繁十郎 祐長 (= 馮璞)	馮六を祖とする平野家の本家 8 代 平野繁十郎 (1796-1857)。諱は祐長。辞書編纂が始まった1851年当時は56歳で、諸立合大通事。
2	鄭 幹輔 永昌 (= 鄭昌)	鄭幹輔 (1811-1860) 諱は昌延。鄭二官 (宗明) を祖とする鄭家の本家 (6 代目か?)。鄭永寧の父親 (永寧自身は養子)。辞書編纂が始まった1851年当時は41歳で、大通事助 (同年に昇格)。1856年に大通事過人に昇格。1857年に大通事に昇格 (同年の平野祐長の死去に伴ったものと考えられる)。1849年に游龍彦十郎 (その子彦三郎は『翻訳満語纂編』の編纂者) とともに崇福寺三門の建設発起人になる。1859年に游龍彦三郎、彭城大次郎 (以上 2 名は『翻訳満語纂編』の編纂者)、太田源三郎、何禮之助、平井義十郎らとともにアメリカ船に赴き、Daniel Jerome Macgowan について英語を学ぶことを許される。ちなみに、鄭永寧の第二子の名も鄭永昌だが、こちらは1855年生まれ。
3	穎川 藤三郎 道恭 (= 陳助)	陳冲一を祖とする穎川家の本家 8 代 穎川藤左衛門 (??-1859)。先に藤三郎、諱は道恭。辞書編纂が始まった1851年当時は小通事。1857年に大通事に昇格 (同年の平野祐長の死去に伴ったものと考えられる)

3.2. 底本と参考書

次に、『清文鑑和解』と『翻訳満語纂編』の編纂に使われた底本について確認しておく。まず、『清文鑑和解』はその内容が『清文鑑』の巻1から巻4をほぼ忠実に翻訳したものである¹⁸。したがって、『清文鑑』が底本であることに疑いの余地はない。一方、『翻訳満語纂編』もまた『清文鑑』を翻訳したものである。しかし、『清文鑑和解』が『清文鑑』の巻1から巻4をほぼ忠実に翻訳しているのに対して、『翻訳満語纂編』は『増訂清文鑑』全巻約18,000語のうちから2,632語¹⁹を選抜したもので、さらに語彙の配列順も十二字頭順に並べ替えられているところが異なる。

では、唐通事たちは『清文鑑』以外に満洲語の書物を見る機会があったのだろうか。この点に関して、上原（1971：15-16）は、満洲語の語釈に付された和訳から、唐通事の満洲語文法に対する理解度を推測して、「『清文啓蒙』『清文虚字指南編』等の書すらも、目を通していなかったのではないかと思われる」と述べる。筆者も唐通事たちが目にすることができた満洲語の書物は『清文鑑』、しかもそれは一部のみであったろうと推測する。『翻訳満語纂編』の序文にある記述がその根拠の一つである。

- ・（前略）…聖治隆化之興唯頼乾隆増訂清文鑑一部闡闢廣文之門譯言甫能就緒又其繁簡錯綜者籍以漢俗之語音擴而充之飜以我…（後略） [巻1序文]
- ・満洲之學始興而其所習修甫經四年唯治本于一部清文鑑除外無有參攷引用之書 …（後略） [巻4序文]

ここから唐通事たちは少なくとも巻4を編纂する安政元（1854）年まで、『清文鑑』以外の満洲語書籍を見る機会がなかったことが分かる。巻5の序文には『清文鑑』に関する指摘がないが、恐らくは終始『清文鑑』のみが彼らの満洲語学習に際して参考にすることができた書物であったろうと推測される。この点については四章で再度後述する。

3.3. 『翻訳満語纂編』の編纂計画

では、『清文鑑和解』はどのような手順で編纂されたのだろうか。『清文鑑和解』は前述の通り、その内容が『清文鑑』の巻1から巻4とほぼ一致し、語彙も部類別に配列されており、訳編者と校合者も各巻一、二名と決まっていることから、その編纂過程はそれほど複雑なものではなかったと推測される。しかし、『翻訳満語纂編』は総勢22名の訳編者が関わっており、さらに『清文鑑』の語彙が字音（十二字頭）順に並び替えられている。したがって、その編纂過程は『清文鑑和解』に比べると、幾分複雑である。まず、『翻訳満語纂編』の各巻の収録語彙数を示すと【表7】の通りである。巻によって大きな変動はない。

【表7】『翻訳満語纂編』の収録語彙数

巻	巻1上	巻1下	巻2上	巻2下	巻3上	巻3下	巻4上	巻4下	巻5上	巻5下	合計
語数	199	204	263	259	334	347	194	233	281	318	2632
巻別語数	403		522		681		427		599		2632

『翻訳満語纂編』は、1851年から1855年にかけて、年に一卷二冊のペースで編纂されたが、どの時

期の編纂に関与したかは訳編者によって異なる。五年間を通じて全巻に関与した訳編者がいる一方で、一年間のみ関与した訳編者もいる。以下の【表8】は各訳編者が各巻においてどの字頭を担当したかを示したものである。

【表8】訳編者別に見た担当字頭

訳編者	巻	担当字頭	訳編者	巻	担当字頭	
1 鉅鹿篤義	1	yo, yu , ke, ge, he, ki	8 颯川春重	1	tu, du, la, le, li, lo	
	2	ji, jo, ju , ya, ye, yu		2	bu, pa, pi, po, pu , sa, se	
	3	co, cu, ja, je, ji, jo, ju		3	ba, be, bi, bo, bu, pa, pi, po, pu	
	4	i, o, u		4	a, e	
	5	se, so, su, ta, da, te	9 蘆塚恒徳	1	gi, hi, ku, gu, hu, fa	
2 彭城昌宣	1	fe, fi, fo, fu, wa, we		2	lo, lu, ma, me, mi , ca	
	2	gū, hū , ba, be, bi, bo		3	du, la, le, li, lo, lu, ma, me, mi	
	3	go, ho, kū, gū, hū		5	u, na, ne, ni, no, nu, ka, ga	
	4	le, li, lu, ma, me, mi, mo, mu		10 游龍俊之	1	si, so, su, sa, se, so, su
	5	de, to, do, tu, du, la	2		fe, fi, fo, fu, wa, we	
3 彭城種美	1	ta, da, te, de, to, do	3		ya, ye, yo, yu, ke, ge, he	
	2	ce, ci, co, cu, ja, je	11 彭城廣林	1	gū, hū , ba, be, bi, bo	
	3	gu, hu, fa, fe		2	su, ta , da, te, de, to	
	4	ba, be, bi, bo, bu		3	sa, se, so, su, ta	
	5	fa, fe, fi, fo, fu, wa, we	12 石崎親之	1	bu, pa, pe, pi, po, pu, sa, se	
4 高尾延之	1	na, ne, ni, no, nu, ka		2	hi, ku, gu, hu, fa	
	2	ga, ha, ko, go, ho, kū		3	nu, ka, ga, ha, ko	
	3	fi, fo, fu, wa, we	13 神代定光	1	ga, ha, ko, go, ho, kū	
	4	ho, kū , gū, hū		2	do, tu, du, la, le, li	
	5	ci, co, cu, ja, je, ji		3	na, ne, ni, no	
5 蔡正邦	2	si, so, su, sa, se, so	14 神代延長	4	de, to, do	
	3	da, te, de, to		5	ge, he, ki, gi, hi, ku, gu, hu	
	4	ca, ce, ci, co, cu, ja, je, ji	15 彭城永祥	4	ga, ha, ko, go	
	5	jo, ju, ya, ye, yo, ke		5	le, li, lu, ma, me, mi, mo, mu, ca, ce	
6 鄭永寧	1	a, e, i, o , u, ū	16 早野志明	4	so, su, sa, se, so, su	
	3	ki, gi, hi , ku		5	ho, ba, be, bi, bo, bu, pa, pi	
	4	he, ki, gi, hi	17 衆学生	2	na, ne, ni, no, nu, ka yu, ke, ge, he, ki, gi	
	5	a, e, i, o		18 呉為祥	3	a, e
	7 官梅盛芳	2			a, e, i, o, u, ū	19 早野晴貞
3		i, o, u, ū	20 颯川道香	1	lu, ma, me, mi, mo, mu	
4		tu, du, la		21 彭城雅美	1	je, ji, jo, ju, ya, ye
5		po, pu, sa, se, si, so, su, sa			22 颯川雅範	1

効率的に編纂しようと思うのであれば、一年間しか編纂に関わらなかった者はさておき、二年間以上関わる者は、その担当字頭を予め完全に決めておけばよさそうなものである。しかし、【表8】が示すように、彭城昌宣、高尾延之、鄭永寧、官梅盛芳、颯川春重、蘆塚恒徳、彭城廣林の八名が複数年に亘って、同じ字頭を担当している箇所が若干あるだけで、全体的に見て各人は毎年違う字頭を担当している。このことは、巻1を編纂しはじめた1851年の段階では『翻訳満語纂編』の編纂に誰がどのように参加し、最終的にどのような形にするかといった青写真が決まっておらず、毎年その年の編纂計画を立てていたことを示唆する。そして、その方針は五年間結局定まることはなかったものと思われる。

また、字音（十二字頭）順に語彙を並べるのであれば、阿蘭陀通詞が編纂した『エゲレス語辞書和解』のように、全巻を通じて字音順に語彙を並べたほうが実用的なはずである（但し、『エゲレス語辞書和解』は僅かに a と b を翻訳しただけで作業は中断してしまった）。しかし、羽田（1936：43）も指摘するように、『翻訳満語纂編』は各巻ごとに「a」から「we」までの語彙を並べており、結果、各巻それぞれが独立した辞書のようになっている。つまり、何かの語を調べようとしても、それが何巻に収録されているのか（或いはどこにも収録されていないのか）は、全ての巻を見ないことには分からない形になっているのである。このこともやはり、編纂を開始する1851年の段階では、青写真が決まっていなかったことを示唆している。

次に、『翻訳満語纂編』において重複する語句があるのかどうかといった語彙選抜の計画について述べる。上原（1971：22）は「総語彙数2635には重複はない。字頭は同じでも、年々新しい語句を訳出したものである」と述べている。しかし、筆者が調査した限りにおいて、重複する語句は存在する。『翻訳満語纂編』に収録される2632語の中で重複する語は、管見の限り、以下に示す十語である²⁰。

『翻訳満語纂編』において重複する語彙

- (1) biya gehun 月朗 [巻2上：26a：彭城昌宣，巻4上：24b 彭城種美]
- (2) fakū 魚梁 [巻2下：40b：石崎親之，巻3下：46b：彭城種美]
- (3) hoton 城 [巻1上：23a：神代定光，巻4上：19b：高尾延之]
- (4) huwejen 攔魚罈子 [巻2下：38a：石崎親之，巻3下：45b：彭城種美]
- (5) kakū 閘 [巻1上：19b：高尾延之，巻3上：25a：石崎親之]
- (6) lala juhe efen 櫻子 [巻1下：5b：穎川春重，巻4下：11a：官梅盛芳]
- (7) mejin cecike 信鳥 [巻4下：14b：彭城昌宣，巻5下：10a：彭城永祥]
- (8) namun 庫 [巻1上：16a：高尾延之，巻3上：17b：神代定光]
- (9) picir seme 物碎雜 [巻2上：31a：穎川重春，巻3上：44b：穎川重春]
- (10) yuyumbi 饑餒 [巻2下：29a：衆学生，巻3下：30b：游龍俊之]

このように確かに重複する語彙はあるものの、全体の総語彙数の中ではごく少数だと言える。唐通事たちは一部の『清文鑑』を使いながらも、互いに訳出する語彙が重複しないように注意を払っていたことが窺い知れる。

3.4. 『清文鑑和解』の編纂時期

『清文鑑和解』と『翻訳満語纂編』はいつ編纂されたのだろうか。上述の通り、『翻訳満語纂編』は序文に識語があるので、成立年はそこから分かる。巻1の成立年は嘉永4（1851）年であり、以後毎年一卷（二冊）のペースで、最後の巻5は安政2（1855）年に編纂されている。これに対して、『清文鑑和解』は底本となった『清文鑑』の序文の和訳はあるものの、『翻訳満語纂編』にあるような独自の序文がなく、識語も見られないため、序文から成立年を特定することはできない。

このような『清文鑑』の成立年について、新村（1917：1927：82）は「巻三の首には甲寅三と書いてあるが、これは嘉永七年甲寅三月譯出の意味であろう」と述べている。しかし、筆者が長崎歴史文化博物館所蔵本を確認する限り、巻3の首に「甲寅三」の文字は見当たらない²¹。

一方で、上原（1971：23）は『清文鑑和解』の成立年について、「五冊の成立年月は不明であるが、その訳述者・校合者が『翻訳満語纂編』の訳編者と重複することは、同時にこの二種の翻訳が進められたとは考えられないから、その成立は『翻訳満語纂編』以後でなければならない。巻四までを完結してそれで終わっていることは、表紙の全五冊は後からの記入で、この書は恐らく幕府末期のもので、その崩壊によって中途に中止せられたものなのであろう」と述べている。

このように『清文鑑』の編纂時期に関する先行研究の見解は一致していないが、結論を言えば、『清文鑑和解』の編纂は『翻訳満語纂編』と平行して行なわれたと考えられる。つまり、『翻訳満語纂編』は嘉永4（1851）年から年一巻（二冊）のペースで編纂されたが、『清文鑑和解』も同様に嘉永4（1851）年から年1冊ずつ、最後の巻4は安政2（1855）年に編纂されたのである。このことは『両通詞諸州之語年々和解之儀ニ付書付』から同定できる（新村 1917；1927：83-84）。『両通詞諸州之語年々和解之儀ニ付書付』は唐通事が『清文鑑和解』と『翻訳満語纂編』を、阿蘭陀通詞が『エゲレス語辞書和解』を、長崎奉行所に進呈する際にそのことを書きとめた記録であるが、唐通事（阿蘭陀通詞）が町年寄の福田猶之進と高島作兵衛に提出した年月と、左の町年寄が長崎奉行所に進呈した年月（日）が記載されている。

【表9】『両通詞諸州之語年々和解之儀ニ付書付』記載の進呈年月（日）

唐通事から町年寄に	町年寄から長崎奉行所に	提出物
亥八月 （=1851年）	亥八月十（廿？）二日	翻訳満語纂編 貳冊 清文鑑和解 壹冊
子九月 （=1852年）	子九月五日	翻訳満語纂編 二冊 翻訳清文鑑 一冊
丑十月 （=1853年）	丑十月	翻訳満語纂編 貳冊 翻訳清文鑑 壹冊
寅十月 （=1854年）	寅十月	翻訳満語纂編 貳冊 翻訳清文鑑 壹冊
卯十月 （=1855年）	卯十月	翻訳満語纂編 貳冊 翻訳清文鑑 壹冊

【表9】の年月日は町年寄及び長崎奉行所に進呈された時点のものであるから、実際に唐通事が辞書の各巻の編纂を開始（進行）していたのはそれよりも前からであったと考えるのが妥当であろう。このことについては、以下の【表10】が大変示唆的である。【表10】は『翻訳満語纂編』に収録されている『清文鑑』巻1から巻5の語彙数とその翻訳年、及びその巻を使った（つまり、その巻に収録されている語彙を選抜し、翻訳した）訳編者を一覧表にしたものである²²。

【表10】『翻訳満語纂編』と『清文鑑』の関係

	1 (1851)	2 (1852)	3 (1853)	4 (1854)	5 (1855)
1		高尾延之 [1] 彭城昌宣 [3] 蔡正邦 [2] 蘆塚恒徳 [2]	穎川春重 [5] 蔡正邦 [1] 彭城種美 [1]	高尾延之 [4] 彭城種美 [6] 蔡正邦 [1] 鉅鹿篤義 [1]	鉅鹿篤義 [2]
	0人0語	4人8語	3人7語	4人12語	1人2語
2	穎川春重 [1] 穎川衛香 [1] 高尾延之 [2] 石寄親之 [1] 鄭永寧 [1] 彭城雅美 [2] 彭城種美 [1] 彭城廣林 [1] 游龍俊之 [1] 蘆塚恒徳 [4] 鉅鹿篤義 [2]	彭城昌宣 [2] 穎川春重 [1] 蔡正邦 [1] 蘆塚恒徳 [1]	穎川春重 [8] 彭城昌宣 [2] 蔡正邦 [3]	高尾延之 [11] 神代延長 [2] 彭城種美 [2] 彭城昌宣 [2]	高尾延之 [2] 彭城永祥 [4] 鉅鹿篤義 [18]
	11人18語	4人5語	3人13語	4人17語	3人24語
3	高尾延之 [1] 彭城種美 [2] 穎川雅範 [2] 鉅鹿篤義 [1] 蘆塚恒徳 [5]	彭城昌宣 [1] 彭城廣林 [1] 神代定光 [3] 衆学生 [2] 石崎親之 [1]	官梅盛芳 [1] 呉為祥 [3] 石崎親之 [1] 早野晴貞 [1] 彭城種美 [2] 彭城昌宣 [3] 彭城廣林 [1] 游龍俊之 [2] 蔡正邦 [1] 鉅鹿篤義 [2]	神代延長 [2]	高尾延之 [2]
	5人11語	5人8語	10人17語	1人2語	1人2語
4	神代定光 [1] 彭城廣林 [2] 彭城種美 [2] 穎川雅範 [1] 彭城雅美 [2] 鉅鹿篤義 [1] 蘆塚恒徳 [2] 彭城昌宣 [2]	官梅盛芳 [1] 高尾延之 [2] 彭城昌宣 [2] 蔡正邦 [1] 彭城廣林 [4] 神代定光 [1] 彭城種美 [1] 鉅鹿篤義 [3]	官梅盛芳 [1] 呉為祥 [9] 石崎親之 [4] 早野晴貞 [2] 彭城昌宣 [3] 彭城廣林 [3] 游龍俊之 [7] 蔡正邦 [1]	彭城種美 [3]	鉅鹿篤義 [1]
	8人14語	8人15語	8人30語	1人3語	1人1語
5	神代定光 [3] 石寄親之 [2] 彭城種美 [3] 穎川春重 [1] 穎川衛香 [1] 蘆塚恒徳 [1]	官梅盛芳 [1] 彭城廣林 [1] 神代定光 [3] 蘆塚恒徳 [2] 彭城種美 [3] 石崎親之 [2]	穎川春重 [2] 官梅盛芳 [3] 呉為祥 [4] 神代定光 [3] 石崎親之 [1] 早野晴貞 [3] 彭城種美 [2] 彭城昌宣 [1] 彭城廣林 [1] 蔡正邦 [1] 蘆塚恒徳 [4]	官梅盛芳 [1] 早野志明 [3] 鄭永寧 [2] 彭城種美 [3] 彭城昌宣 [1] 蔡正邦 [1]	官梅盛芳 [1] 神代延長 [1] 早野志明 [2] 鄭永寧 [15] 彭城種美 [17] 彭城昌宣 [12] 蔡正邦 [1] 蘆塚恒徳 [2] 鉅鹿篤義 [10]
	6人11語	6人12語	11人25語	6人11語	9人61語
6以下は省略					

【表10】からは、『翻訳満語纂編』が収録する語彙のうち、『清文鑑』の巻1から採ったもので、1851年に翻訳したものは一語もないことが分かる。『清文鑑』の巻1から巻4は、すなわち、『清文鑑和解』巻1から巻4と重複する。つまり、このことは『清文鑑和解』の巻1が1851年に編纂されていたことを示唆する。同様に、『翻訳満語纂編』が収録する語彙のうち、『清文鑑』の巻2から採ったもので、1852年と1853年に翻訳したものは非常に少ない。すなわち、『清文鑑和解』の巻2（上下2冊）はこの時期に編纂されていた可能性が高い。同様に、『翻訳満語纂編』が収録する語彙のうち、『清文鑑』の巻3、4から採ったもので、1854年と1855年に翻訳したものは非常に少ない。すなわち、『清文鑑

和解』の巻4と巻5はこの時期に編纂されていた可能性が高いといえる。

4. 辞書編纂の打ち切り

このようにして『清文鑑和解』と『翻訳満語纂編』は編纂されていったと考えられるが、満和辞書の編纂は突然終焉を迎える。『清文鑑和解』は巻4で終わっているが、これは『清文鑑』の巻1から巻4までを翻訳したものである。『清文鑑』自体は巻32まで存在するから、その作業はまだまだ継続することが可能であったはずである。それにも拘わらず、安政2（1855）年で辞書編纂作業は終了してしまっただけである。一方で、『翻訳満語纂編』とはいえば、やはり巻5を最後に編纂作業は終わる²³。その中でも、巻5の編纂作業に興味深い点を確認される。以下の【表11】は、毎年各訳編者が担当する項目の語彙を選抜する際に、『清文鑑』のどの巻から何語を選択したのかを示したものである²⁴。

【表11】『清文鑑』のどの巻をいつ担当したか（訳編者ベース）

鉅鹿篤義

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		2	1	1		3	8						1			
2				3			12	1	1							
3			2				5		2			1		1		
4	1						2		1	1						
5	2	18		1	10	3	4	1	2	1	2		3	3	5	
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			3	2	1	1	1	2	1				2	4	3	8
2			1	5	1		1			1	2	1	2	9		
3	1			6		3	5	1	1	1	2	2	10	1	4	2
4				7		3		1			2			5		3
5	2	1	2		2	1	1		1	2		6	1	2		3

彭城昌宣

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1				2		1	3						1			1
2	3	2	1	2			4		4		1					
3		2	3	3	1	6	1	3	1		2					1
4		2			1	1	3	1				1			2	
5					12	10	11	9	13							
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			1	6		2	1		1			2		1	2	
2	1		2	7		2		1	1	1	1	2	2	5	2	
3	1	1	2	2	2	4	1	2	2	1			2	4		1
4		1	1	1	2			3	2		5	3	3	4	5	2
5																

彭城種美

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		1	2	2	3	1	2	1	3							1
2				1	3	1	7	4	2	2	1					
3	1		2		2	6	2		4	2						
4	6	2		3	3	3	1			3	2	1	4		1	
5					17	17	16	7								
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			1	2	1	8		2	1		1	2		3	2	1
2			1	3		3	1	1	1		1	1		4	1	2
3				2	2	2	1		3		1	1		5	1	2
4	1															5
5																

高尾延之

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		2	1				3			1		3				
2	1			2		1			1							
3								2	1							
4	4	11														
5		2	2				7						2	4	1	
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			3	4		5		2	3		2			1	1	
2			1	4					5		2	3	6	3		1
3			5		1	4	5	2	4		5	1	3	4		3
4			2				1	1		2	1	3				4
5	2	1											1	2		

蔡正邦

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
2	2	1		1			2	1	4	2					1	
3	1	3	1	1	1	1		3	3	2	2	2	1		1	
4	1				1	2	3		2		2			2		
5					1	2	4		2	8	5			4	2	
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
2	1		3	3	1	3	2	2	4	5			1	3	3	2
3			6			1		1	5	2	2		1	6	8	1
4			1	1	1	6	4	3	3	3	1	2	1	5	3	
5	1		2	1	1	3	3	4	5	1	5	2		1	3	4

鄭永寧

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		2		1			3				2					
3						3	2		11		4	1				1
4					2		4	7	4	9		1	3	23	3	
5					15	12	23	7								
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			1	4	1			2			1	1	1		1	
3				2		6	4		2					1		
4	1	1					1	1								2
5																

官梅盛芳

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
2				1	1	1	2		3	1						
3			1	1	3	6	5	2	4	2		1	2	1	1	
4					1	3	4	2	1	2		1				
5					1	3	5	1	5	2	1	1	1	1	1	
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
2			2		4	3	1	2	2	2	2		1	1	1	3
3		1	1	2		2	2	4			2		1	1	1	2
4	1		3	1	1	4	1	3	2	1	3		2	1	2	2
5			1			1	2	4	1	3	4	3	1	3	3	5

穎川春重

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		1			1		9		3	1						
2		1				4	2		2		1		2	4		
3	5	8			2	4		3	2		1		4	2		
4						5	7									
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1						8		1			3	1	2	2	5	3
2	1			2		1	1	2	5				1	5	5	1
3	1	1				11	2	1	1			4			1	
4				12		3										

蘆塚恒徳

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		4	5	2	1		1			1						
2	2	1			2	2	1		3				2	2	1	1
3					4	2	4	1	2	3	2		1		2	1
5					2	1					11	2	2	1		1
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			3			2					2	1				
2	1	2	2	2	1	4	1	1	4							
3	2		2			2			3	1			2		3	4
5	1	5					3	1	1		8		7		1	

游龍俊之

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		1				1	1	1	2							
2							7		1	1						
3			2	7	3				1			7		6		
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			1			3	2	1			4	3	6	3	2	2
2			3	2		4		3	3		4	1	8		2	1
3	4	2	2	3	2	2	3		1						2	1

彭城廣林

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		1		2			3			2						
2			3	4	1	10	3		1	1		3				
3			1	3	1	2	11		2	3						
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			2	2		4			3		1	1	1	2		1
2				3		2	1		2	2			1	4	1	
3			2	6		2	3	4			4	1	2	2		1

石崎親之

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		1			2				1				1	4		
2			1		2		1		1	1	1	1	1		1	
3			1	4	1	2		4	1			2		1		1
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			3	2		4		1	1	1	4		2	1	2	
2	1		3	2	1	9	1	3	2	2			2	2		
3			1	1	1	3	4	2		1	3	1	1	2		3

神代定光

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1				1	3		1	1				2	1	1		
2			3	1	3	2	4	2	4							
3					3	1	4						4		1	
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			2	1		1	1					1		4		
2				7		1			2	1			3	2		
3		7	1	1		1	1	4	3	1		4		6		5

神代延長

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
4		2	2			4		4					3	1		
5					1	2	1	10			3	9	2	1		2
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
4	2	2		3	1	3	2			2		1	1		1	
5	3	5	2	1	2	1	1	2		1	1		4	6	1	

彭城永祥

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
4						1	1	1	1	1	1	2				
5		4							2	10				1	1	
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
4					2	3	1	4		3	3	3		2		7
5	1	19		2		1	1	1	6		2		2	2	1	

早野志明

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
4					3	4	1	1	5	2		1		1		
5					2	3	3	1	2	2	3				2	
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
4			1	1		5	1	1	1	3	4	1	4			1
5	1		6	2	2	2		2	1	1	2	1	6			1

衆学生

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
2			2				14	9					3			
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
2			3	7		4							5	13		

具為祥

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
3			3	9	4	4	12			1		4				3
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
3	1	1	1			1		4								

早野晴貞

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
3			1	2	3	5	4	1	5	1		1		1		
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
3			4	2		1	2	2				1				1

穎川道香

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		1			1	1	4	1	3	2						1
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			2	1				2			3	3	1		2	2

彭城雅美

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1		2		2			4		3	1	2					
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1			1	1	2	1		2		1	1	5	1			1

穎川雅範

	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16
1			2	1												
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1				2	1	2		1		1			3		1	

【表11】を見ると、まず、各訳編者が『清文鑑』の各巻から満遍なく語句を選択していることが分かる。これは上述した、唐通事たちが使用することができた満洲語の書物が、『清文鑑』一部のみであったことを示唆していると言える。『翻訳満語纂編』の語句を選択する際に、訳編者は恐らく各一つの巻を熟考するよりは、自分が翻訳できそうな語句をいち早く探しては、その巻を次の訳編者に渡し、幅広く語彙を収集していたことが窺えるのである。

ところで、【表11】からは、『翻訳満語纂編』巻5の編纂に関して、もう一つ興味深い事実が窺える。【表11】を見るに、巻1から巻4を編纂する際に、各訳編者が『清文鑑』の各巻から10語以上の語句を選択した例はほとんど見られない。これに対して、巻5は各訳編者（特に、鉅鹿篤義、彭城昌宣、彭城種美、鄭永寧、彭城永祥の五名）が『清文鑑』の各巻から十語以上の語句を選択した例が圧倒的に増えるのである。すなわち、巻5の編纂に関しては、様々な巻から幅広く語句を収集するのではなく、一つの巻から集中的に収集しているのである。これは『翻訳満語纂編』巻5の編纂が何らかの事情によって急務であったことを示唆するといえよう。ただ、『翻訳満語纂編』巻5の編纂が急がれた理由は、明らかではない²⁵。

5. おわりに

以上、本論文では唐通事が満洲語の学習をはじめて満洲語辞書を編纂するに至るまでの過程を追いながら、できる限り、その詳細や背景について考察してきた。時代の波に翻弄されながらも、わずかながら『清文鑑』のみを頼りにしながら、満洲語の学習と辞書の編纂に奮闘していた唐通事の姿が思い描かれる。満洲語辞書の編纂作業は、時代に取り残されるように中断されたが、結果的に唐通事自体も江戸幕府の終焉とともにその役割を終える。『清文鑑和解』と『翻訳満語纂編』の最終巻が編纂された安政2（1855）年といえば、その一年前に締結された日米和親条約によって下田、函館の二港が開港されており、また、その三年後に日米修好通商条約によって長崎と共に、神奈川、新潟、兵庫

が開港される頃である。このように、江戸時代の長崎に与えられていた貿易の特権が次第に失われていく中で、『清文鑑和解』と『翻訳満語纂編』の編纂は、唐通事たちの唐通事としての最後の輝きだったと言えるのかもしれない。唐通事が試みた満和辞書の編纂は、その後、冒頭に紹介した羽田(1937)に引き継がれていくのである。

注

- 唐通事とは、鎖国下にあった江戸時代に幕府直轄地の長崎で、唐船貿易に関わる諸業務、中国語の翻訳、通訳といった外交、貿易に携わった地役人である。初代唐通事は慶長9(1604)年に登用された馮六であるとされ、以後、唐船貿易が発展する中で、定員増員や職制分化を繰り返す、世襲されていった。唐通事はほぼ全員が明末清初に渡来した唐人とその子孫であると言われ、家系は70数家があったとされる。唐通事に関する詳細は長崎市史編さん委員会〔編〕(2012:570-582)などを参照。
- 長崎歴史文化博物館に所蔵される同文献には「嘉永3(1850)年、幕府は唐通事に満洲語を、蘭通詞に英・露語等を研修させた。この書はその結果として翌4年より訳出されたもので、現在、清文鑑和解5冊、翻訳満語纂編10冊を蔵す。長崎奉行所より長崎県に引き継ぎたるもの」と書かれたカードが付されている。
- 文献番号は「12/2-2/1~5」。また、同文献は4巻5冊(巻2は上下2分冊)であるが、巻1と巻4の表題に『清文鑑和解』とあり、巻2と巻3の表題に『翻訳清文鑑』とある。どちらで称するかは厄介な問題であるが、本論文では以下『清文鑑和解』とする。『清文鑑和解』の書誌情報は、上原(1971:23)に詳しい。
- 文献番号は「12/1-2/1~10」。5巻10冊(各巻2分冊)からなる。『翻訳満語纂編』の書誌情報は、上原(1971:13-14)、赤峯(1989, 1990, 1991)に詳しい。
- 駒澤大学濯足文庫にも『翻訳満語纂編』と『清文鑑和解』の写本が現存するが、前者は巻1~巻3の全六冊、後者は巻1と巻2の全三冊のみである(金沢1910)。筆者は以前これらの写本を見る機会を得たが、その時は全ての異同を確かめる時間を得なかった。試しにいくつかの語彙を比べてみた感じでは、改行などに若干差異があるものの、内容に相違はないように思われる。
- 本研究では、『清文鑑』を参照する際に、以下のマイクロフィルムの版本を使用している。『御製増訂清文鑑』:天理図書館所蔵満語文献集、雄松堂フィルム出版、1966
- 慶応義塾大学斯道文庫所蔵「文化七庚午十二月ヨリ 唐船持渡書物目録留」の中の「午三番船」に「御製増訂清文鑑 拾二部各八套」、「午六番船」に「音漢清文鑑 一部一套四本」、「午拾番船」に「御製増訂清文鑑 壹部八套」との文字が見えるので、この時期に『清文鑑』が長崎に持ち込まれたことが分かる(大場1967:423-425)。
- 長崎聖堂は正保4(1647)年に向井元升(1609-77)によって創建された儒学の教育機関。その後、正徳元(1711)年に中島川畔へ移転されたことから、中島聖堂とも呼ばれる。儒学の教育のみならず、唐船持渡書の検閲、落丁や摩滅の有無の調査、書物目録の作成といった書物改の業務も執り行った(長崎市史編さん委員会〔編〕2012:754-756)。『清文鑑』が中島聖堂に保管されたのはそのためであろう。また、唐通事が辞書編纂を行なった場所は、唐通事の職場であった唐通事会所か或いはこの中島聖堂だったのではないかと筆者は考える。享保元(1716)年、中島聖堂の明倫堂内に「唐音勤学会」が設置される。これは唐通事の子弟たちの学校で、毎月定日に大通事や小通事の指導により、中国語の学習が行なわれたという。唐音勤学会は一時期廃止されるが、天保10(1839)年に再興され、唐通事自体がその役割を終える明治元(1868)年まで、活動を行なったとされる(長崎市史編さん委員会〔編〕2012:576, 757)。唐通事が満洲語の学習を再開した嘉永3(1850)年は、唐音勤学会が既に再興され、その活動を行なっていた時期にあたるため、唐通事が満洲語の辞書編纂を行なった場所も恐らくは中島聖堂だったのではないだろうか。
- 文化9年に『清文鑑』が中島聖堂に備え付けられたことについては、書物改役の向井元仲が記した『書物改一件』から確認される(武藤1917a, 新村1917)
- 着手までに二度の中断があったという事実は『翻訳満語纂編』の序文より分かる(新村1917)。
- 筆者も2012年夏に蔡慎吾の墓碑を実際に確認したが、羽田博士が踏査した時から原子爆弾の投下を経て八十年近く経った現在に至っては、墓石の側面に刻まれた文字は、墓石を丹念に磨いて拓本でも取らない限り、目視での判読は既に困難な状態になってしまっていた。
- 『両通詞諸州之語々和解之儀二付書付』は、唐通事が『清文鑑和解』と『翻訳満語纂編』を、阿蘭陀通詞が『エゲレス語辞書和解』を長崎奉行所に進呈した際のことを記録したものであるが、これが一冊にまとめられていることから、唐通事の満洲語辞書編纂と阿蘭陀通詞の英語辞書編纂の間に何らかの関連があったことを示唆している。
- 古賀(1947:7-12)は、文化5(1808)年11月に満洲語の学習を命じられた唐通事が大通事神代太郎、小通事頼川仁十郎、東海安兵衛、彭城仁左衛門、小通事並彭城太次兵衛、小通事末席平井考三郎、楊又四郎、稽古通事吾定次郎の八名だったと述べるが、その典拠となる史料についての言及はない。
- 8の「頼川重春」は、巻5の名簿(目次)に名前が挙がっているため、当初は巻5の編纂にも参加する予定だったと考えられる。しかし、実際に本文を担当した形跡はない。
- 13の「神代 時次 定光」は14の「神代 時次 延長」と或いは同一人物の可能性もある。参加時期は相補分布し、誤りの性質も類似する点が多いからである。

- 16 19の「早野 新次郎 晴貞」は16の「早野 新次郎 志明」と或いは同一人物の可能性もある。参加時期は相補分布し、誤りの性質も類似する点が多いからである。
- 17 『両通詞諸州之語年々和解之儀二付書付』を見ると、『清文鑑和解』と『翻譯滿語纂編』を町年寄に提出する際も、この三名の連名になっていることから、この三名は監修者であったと考えるのが妥当である。
- 18 『清文鑑和解』と『清文鑑』の収録語彙は、以下の二点を除けば、全く同じである。
- (1) 『清文鑑』の巻1に収録されている「fiyakiyan 賜」が『清文鑑和解』にない。『清文鑑和解』で漏れている語は、管見の限り、この一語のみであるから、これは恐らく唐通事の見落としが原因であると考えられる。
 - (2) 『清文鑑』の単語配列と『清文鑑和解』の単語配列は、わずかに配列順に違っている所がある。これは『清文鑑和解』を綴じる際に、誤って頁の順が前後したためと考えられる。
- 19 上原 (1971: 22) は、『翻譯滿語纂編』の総語彙数を2635語であると述べるが、筆者が数えたところ、2632語である。
- 20 本論文では、『翻譯滿語纂編』のデータ処理に際して、栗林均氏 (東北大学) 作成の「『五体清文鑑』検索システム」及び東京外国語大学の「Full Text Search 19 http://irc.2010-server.a.tufs.ac.jp/FullTextSearch/_19.html」を使用した。検索ソフトを紹介してくださり、またその使用を快諾くださいました栗林均先生にこの場を借りて感謝の意を表します。
- 21 新村博士は或いは駒沢大学濯足文庫所蔵本を見ていたのかもしれない。
- 22 【表10】の見方であるが、一番左の縦列にある数字は『清文鑑』の巻数、一番上の横列にある数字は『翻譯滿語纂編』の巻数を表している。氏名は『翻譯滿語纂編』の該当巻を担当する際に、『清文鑑』の該当巻を使用した人物、氏名の右にある括弧内の数字は『清文鑑』の該当巻から選抜した語彙の数である。つまり、例えば、『翻譯滿語纂編』巻2を編纂する際に、『清文鑑』の巻1を見たのは高尾延之、彭城昌宜、蔡正邦、蘆塚恒徳の四名であり、それぞれが選抜した語彙数は一語、三語、二語、二語であったということになる。
- 23 古賀 (1947: 62-66) は唐通事が満洲語の学習を中止したことについて以下のように言及している。
- 「しかるに、第十九世紀の後半に至り、嘉永六癸丑年 一八五三年 米国海軍提督ペルリの渡来の頃より、吾邦と欧米諸国との交渉は、急激に展開するに至りしため、蘭通詞のうち江戸出張を命ぜらるる者も亦増加し、翻訳や通弁の必要は、いよいよ深く感悟せらるるに至った。しかも、蘭語の外に、吾邦と交渉密接なる国の言語を、蘭通詞の外、一般有志の者にも学習させて、西力の東進に対応すべき必要が十分認識せらるるに至った。… (中略) …
- それから、閣老阿部伊勢守は、安政二乙卯年十一月廿七日附、長崎奉行宛書取に於て、「通詞の外にも、有志之輩は、勝手次第稽古為致、翻譯通辦等出来候方可然」と述べている。
- 随って、長崎奉行川村對馬守は、洋学の修業方に就きて、一応唐通事及び蘭通詞の意見を徴する事にした。
- 彼は、唐通事たちに、満洲語の学習を中止して、洋学に転ずる方が、御用弁にもならうと諭してみると、唐通事たちに於ては、いづれも異議なく承知した。そして、唐通事たちより、洋語に唐音を附したる五車韻府、其他、右類の書籍を支那より取寄せ度き旨を申出でた。」(傍点は古賀 (1947) にあるものをそのまま表記)
- 古賀 (1947) によれば、安政2 (1855) 年をもって、唐通事が満洲語の学習、すなわち、満洲語辞書の編纂をやめた理由は、長崎奉行川村對馬守に洋語の学習に転じることを勧められ、それに応じたからということになる。だが、古賀 (1947) はこの指摘の典拠となる史料について言及していない。なお、唐通事のその後の英語研究については、古賀 (1947: 73-82) に詳しい。
- 24 【表11】の見方であるが、一番左の網掛けになっている縦列の1~5は『翻譯滿語纂編』の巻数、一番上と真ん中の網掛けになっている横列の1~32は『清文鑑』の巻数である。それぞれのセルにある数字は『清文鑑』の該当巻から『翻譯滿語纂編』の当該巻に何語が選抜されたかを表している。つまり、例えば、鉅鹿篤義は『翻譯滿語纂編』巻1を編纂する際に、『清文鑑』巻2から二語、巻3から一語、巻4から一語選抜したということが分かる。
- 25 同時期に阿蘭陀通詞が編纂していた『エゲレス語辞書和解』は、安政元 (1854) 年、すなわち、『翻譯滿語纂編』巻5が編纂される一年前に、やはり作業を完遂することなく、途中で終焉を迎えている。

【参考文献】

- 赤峯裕子 (1989) 「〈翻刻〉『翻譯滿語纂編』抄 その一」『文献探求』24: 57-75.
- 赤峯裕子 (1990) 「〈翻刻〉『翻譯滿語纂編』抄 その二」『文献探求』26: 55-71.
- 赤峯裕子 (1991) 「〈翻刻〉『翻譯滿語纂編』抄 その三」『文献探求』28: 72-89.
- 石原千里 (1984) 「エゲレス語辞書和解とその編者たち」『英学史研究』17: 109-124.
- 上原久 (1971) 「長崎通事の満洲語学」『言語学論叢』11: 13-24.
- 大庭脩 (1967) 『江戸時代における唐船持渡書の研究』、関西大学東西学術研究所
- 金沢庄三郎 (1910) 「東洋語比較研究資料」『国語の研究』、同文館
- 古賀十二郎 (1947) 『徳川時代に於ける長崎の英語研究』、九州書房
- 新村出 (1914) 「高橋景保の満洲語学」『藝文』5 (新村出 1927 『東方言語史叢考』: 44-72、岩波

書店、所収)

新村出 (1917) 「長崎唐通事の満洲語学」『藝文』 8 (新村出 1927 『東方言語史叢考』: 80-92、岩

波書店、所収)

長崎市史編さん委員会 [編] (2012) 『新長崎市史 第二卷近世編』、長崎市

羽田亨 (1936) 「清文鑑和解・満語纂編解説」『東洋史研究』 1 (6) : 547-552.

羽田亨 [編] (1937 : 1972) 『満和辞典』、国書刊行会

林陸朗 (2010) 『長崎唐通事 増補版—大通事林道栄とその周辺—』、長崎文献社

宮田安 (1979) 『唐通事家系論考』、長崎文献社

武藤長平 (1917a) 「崎陽訪古志」『歴史地理』 (武藤長平 1926 『西南文運史論』: 204-232、岡書院、

所収)

武藤長平 (1917b) 「鎮西の支那語学研究」『東亜経済研究』 2 - 1, 2 - 2 (武藤長平 1926 『西南文運史論』: 42-63、岡書院、所収)